

平成25年度 岩手県農業研究センター試験研究成果書

区分	指導	題名	大吟醸酒向け水稻品種「結の香」の栽培の目安			
[要約] 大吟醸酒原料向け水稻品種「結の香」の倒伏を抑え、収量、品質を確保するための目安となる㎡当り籾数の上限は2万4千粒であり、追肥は幼穂形成期における生育の目安をもとに調整する。成熟期（黄化籾割合8割）に達する登熟積算気温は1000～1100℃である。						
キーワード	大吟醸造酒用好適米「結の香」		生育の目安	○技術部作物研究室		

1 背景とねらい

大吟醸造酒用として生産が始まった「結の香」（岩手酒98号）は、低タンパクで40%の高度精米の歩留まりが「山田錦」並みに良好な品種である。この品種の栽培の安定化を図るための生育の目安を示す。

2 成果の内容

(1) 「結の香」の倒伏を抑え、収量、品質を確保するための目安となる㎡当り籾数は2万4千粒を上限とする（図1）。これまでの栽培事例からみた収量構成要素は次のとおりである。

稈長 (cm)	㎡穂数 (本/㎡)	一穂籾数 (粒)	㎡籾数 (千粒)	玄米千粒重 (g)	登熟歩合 (%)	収量水準 (kg/10a)
70～75	320～370	60～70	19～24	26～29 ※篩目2.0mm	85～90	470～570 ※篩目2.0mm

(2) 「結の香」の葉色は、生育初期から淡く推移し、徐々に濃くなり、幼穂形成期前からまた徐々に淡くなる特徴があるので、肥培管理において考慮する（図2）。

(3) 幼穂形成期における地上部乾物重は「ひとめぼれ」の8割程度、稲体窒素吸収量は「ひとめぼれ」の6割程度である（図3、4）。倒伏を抑え収量、品質を確保するため、幼穂形成期における追肥の目安となる生育量（草丈×茎数×SPAD値）は 14.4×10^5 以下とする（図5）。収量を勘案すれば幼穂形成期における生育の目安は次のとおりである。

移植後の積算 日平均気温 (℃)	草丈 (cm)	茎数 (本/㎡)	葉色 (SPAD)	地上部 乾物重 (g/㎡)	稲体 窒素濃度 (%)	稲体窒素 吸収量 (g/㎡)	草丈 (cm) ×茎数 (本/㎡) ×葉色値
1200	50～60	400～600	38～40	250～300	1.0～1.5	2.5～4.5	$7.6 \sim 14.4 \times 10^5$

(4) 成熟期（黄化籾割合8割）に達する出穂後の積算日平均気温は1000～1100℃である（図3、4）。穂発芽しやすいことから刈り取り適期範囲内でできるだけ早めに収穫する。

3 成果活用上の留意事項

(1) 倒伏しやすい品種なので、当面基肥は窒素成分はひとめぼれ並（4～6kg/10a程度）とし、幼穂形成期において栄養診断の目安を参考に窒素成分2kg/10a以内で追肥量を調整し、籾数が過剰にならないようにすること（図1）。

4 成果の活用方法等

(1) 適用地帯又は対象者等 酒造組合との契約栽培農家（紫波・奥州）を指導する農業普及員等
(2) 期待する活用効果 大吟醸酒向け水稻品種「結の香」の安定生産

5 当該事項に係る試験研究課題

(H22-rb02) 醸造用水稻品種の育成（山田錦を超える米）[S63～H25/令達]
(803) 水稻奨励品種決定調査[H14～25/県単]

6 研究担当者 高橋 智宏、菅原 浩視、伊藤 信二

7 参考資料・文献

- 平成21～25年度作物研究室成績書（一部未定稿）岩手県農業研究センター
- 平成23年度試験研究成果「大吟醸酒原料向け水稻品種『岩手酒98号』の育成」
- 稲作指導指針

8 試験成績の概要

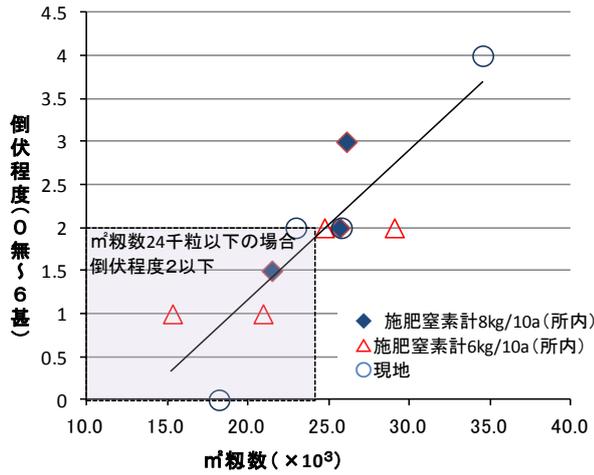


図1 「結の香」の成熟期m²当り穂数と倒伏の関係

結の香・移植後の積算気温と葉色の関係

(移植～7/25まで)

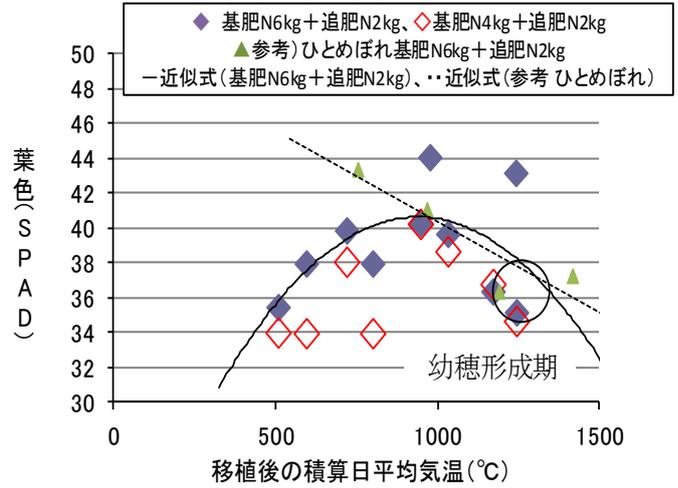


図2 「結の香」の移植後の積算日平均気温と葉色

結の香・移植後の積算気温と地上部乾物重の関係

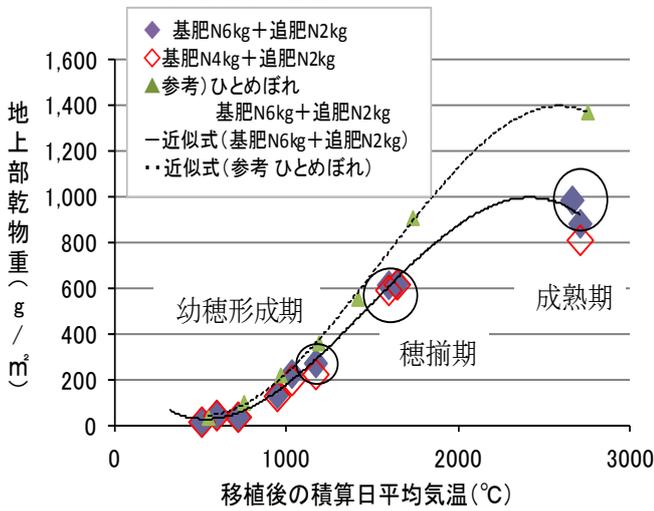


図3 「結の香」の移植後の積算日平均気温と地上部乾物重

結の香・移植後の積算気温と稲体窒素吸収量の関係

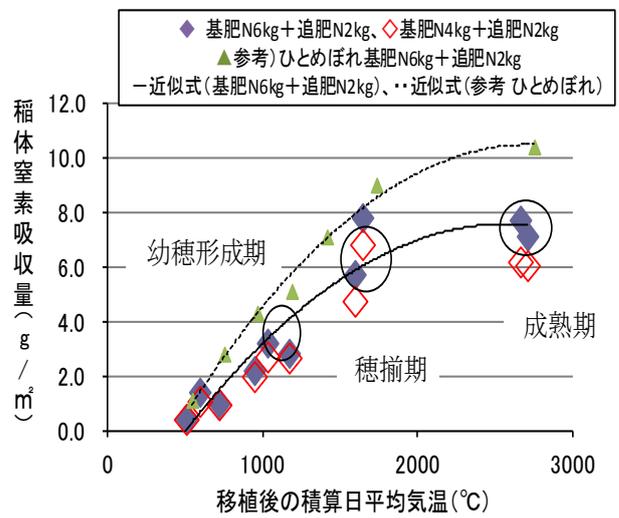


図4 「結の香」の移植後の積算日平均気温と稲体窒素吸収量

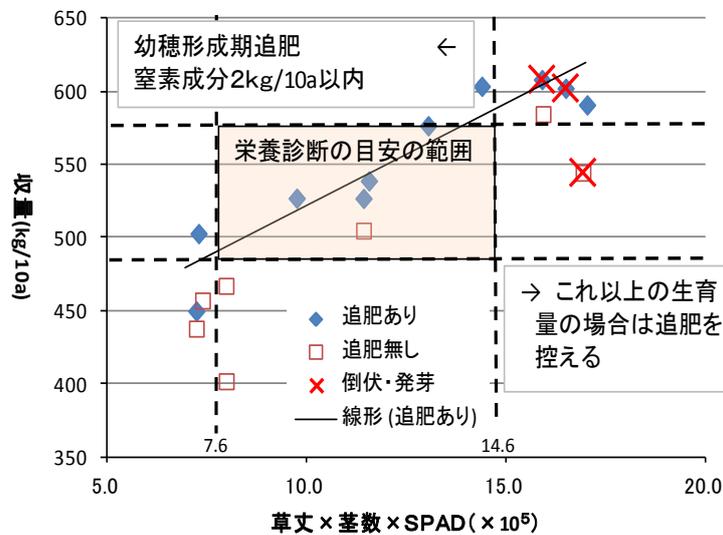


図5 幼穂形成期頃の生育量(草丈、茎数、葉色の積)と収量の関係